

雨水市民の会

会長 辰濃 和男

〒131-0032 東京都墨田区東向島 1-8-1

TEL: 03-3611-0573 FAX: 03-3611-0574

H.P: <http://www.skywater.jp/>e-mail: office@skywater.jp

2005年8月に向けて

速報

”つなごう世界、救おうアジアの水危機” ここまで来た雨水東京国際会議

12月18日(土)にすみだ環境ふれあい館にて、第3回雨水東京国際会議実行委員会幹事会が開かれました。事務局側からこれまでの経過説明があり、日程やアナウンスメントの案が提示されました。また、各分科会の進捗状況についても報告がありました。

なお、詳細は1月に立ち上げる予定の雨水東京国際会議実行委員会のホームページにおいて紹介される予定です。

基調講演の講師、決定

今年8月7日のプレ会議と合わせて開かれた第2回雨水東京国際会議実行委員会での方針を受け、事務局では、雨水東京国際会議の基調講演にふさわしい講師として、アジット・ビスワス博士と交渉してきました。

同氏は、水資源の分野では国際的な

第一人者です。元国際水資源学会(IWRA)会長で、同学会からクリスタルドロップ賞を受賞しておられます。雨水利用のよき理解者であり、国際水紛争の解決のために積極的に提言されてもいます。現在は、メキシコ市に活動拠点を置く「第三世界水管理センター」の所長として、国際講演を数多くこなすなど、水危機打開に尽力されています。

先般、同氏から、基調講演快諾の返答がありました。

国際雨水サミットの人選進む

基調講演に続く国際雨水サミットは、国際会議の主題である「つなごう世界、救おうアジアの水危機」にそって、産官学民のトップから水危機打開に向けた提言をしていただくという企画です。海外からの招待者として、ドイツの雨

目次

- P2: 熱が入ってきた分科会活動状況
- P5: 関西で雨水技術者セミナー開催
- P6: あまみず公開セミナー第1回報告「江戸の下水道－川柳が描く水と暮らし」
- P7: 第2回報告「緑のダムと水循環」
 - ・すみだまつりで手作り雨水タンクをPR
- P8: 募集！あまみず公開セミナー(1月29日)
 - ・雨水探検隊・自作のお米を堪能する
- P9: 風コーナー
 - ・車道の雨を植樹帯に浸透させる安藤さんたちの試み
 - ・バイオガス発電の研究で工学博士取得！小川幸正さん
 - ・新会員紹介：原田龍彦さん
- P10: 皆さんの支援金で雨水タンクを送りました

雨水東京国際会議日程

2005年

8月1日(月)～6日(土) ポスター展示・企業展示

8月3日(水) 自由発表

8月4日(金) 基調講演 アジット・ビスワス博士

(第三世界水管理センター所長・元国際水資源学会会長)

基調報告 辰濃和男(雨水東京国際会議実行委員会会長)

国際雨水サミット

分科会・交流会

8月6日(土) 分科会とまとめ

8月7日(日) 見学会(雨水資料室や雨水利用施設など)

水利用技術者集団(f b r)副会長でドイツの雨水利用システムの国家規格の作成に関与されたクラウス・ケーニヒ氏や国際雨水資源化学会会長のジェシカ・サラス氏、国連環境計画環境政策部長スイン・ツバイダル氏らの名前があがっています。

協賛金集めにご協力を

海外からの招待者の人選と並行して、その招聘のための資金集めに苦慮しています。現在、国際交流基金などの海外招聘助成事業に申請していますが、必ずしも、うまくいくとは限りません。そこで、現在、協賛企業回りに汗をかいています。国際会議を成功させるためにも、知恵をお貸しください。また資金集めにみなさんのご協力とご支援をお願いします。カンパも大歓迎です。

正式なアナウンスは、来年の1月末～2月上旬になると思われます。チラシも来年1月にはできます。資金集めや、来年の国際会議の周知にお使いになる方は国際会議事務局までお問い合わせください。また、ホームページからもダウンロードできるようになります。

国際会議実行委員会事務局は下記のとおりです。お気軽にお問い合わせください。

国際会議実行委員会事務局：

墨田区役所環境保全課雨水利用担当（高島）

電話 03-5608-6209

FAX 03-5608-6934

議題満載! 熱が入ってきた分科会活動

8月5日の午後、6日には分科会での議論が主体となります。これまで9つの分科会が立ち上がっています。メーリングリストなどを通じ、他の分科会の

活動にも積極的に参加し、議論を重ねています。これからさらに焦点を絞っていかねばなりません。各分科会の活動は、これからの参加も自由です。

「雨の環境教育」分科会

これまで「雨に関する環境教育学習」の試みを調査し、資料を収集しました。来年1月以降は、実際に模擬授業などを行ないます。2005年8月の国際会議には、まとめとしてのテキストや環境教育の教師のための授業マニュアルなどまで作りたと思っています。これまでに、3回の勉強会を行ないました。

小平市ふれあい下水道館の見学(10月2日)

笠井守先生による「雨の授業の実践」(11月13日)

…今回の目標である「環境プログラムのテキスト」の骨子となる「雨あつめ大作戦！」など、雨水を集める体験をさせることが大事だと思いました。

人見達雄さんによる「雨水と防災グッズづくり体験」(12月4日)

…ペットボトルの浄水装置は、雨水を汚しているものはなにかを考えさせてくれました。

【原田龍彦】



「雨水を活かした緑豊かな都市づくり」分科会

部会メンバーには、建築士、日本下水文化研究会、関西雨水の会、環境とまちづくりの活動をされている方と強力メンバーが揃っています。しかし皆さん忙しくて、3回ほど会合を開きましたが、まだ全員揃ったことがなくヨチヨチ歩きで進行中です。

方向性としては、実践的で地域に根ざした提案となる分科会にすることを目標に掲げています。都市緑化の議論は、各方面で行われているため一般論ではなく、雨水市民の視点から、墨田区をベースに地に着いた内容、市民・行政・企業にアピールする具体的な切り口を探している段階です。例えば、「何故、東京の学校の校庭は、土がないの?」「一家に一草木運動を」「アスファルトを土に戻すには」「すみだの緑の今・昔・未来～その風土」「造らず増やす緑の方法論～路地裏のみどり観察隊」「屋上緑化の限界と今後」「雨水、緑・水・土への効用」などなど、まじめに楽しく討論中です。 【松本正毅】

「雨水貯留・浸透・利用」分科会

この分科会は、雨水の貯留・浸透・再利用について現在考え得る最善の姿を「雨水ハウス」という形にまとめ上げ、体験型学習施設として国際会議後も有効に活用されていくことを最終目標に活動を進めております。その実現に向けたアイデアを練るため、分科会のメンバーは、各地のこれかと思える先進的な施設の見学会や勉強会を精力的に重ねております。そうした中で、貯留と浸透を別々に取り組むのではなく、複合的に推進していくことが大切であるとの共通認識がメンバー間で共有化されつつあります。

雨水ハウスの具体的な規模は確定しておりませんが、広さ8畳程度で、屋根には太陽光発電設備を設け、その電力で地下貯留タンクから屋根に雨水を汲み上げ循環させるようなアイデアも出ております。国際会議当日は、「雨水ハウス」を囲んで、世界各地の先進的なメンバーと意見交換会を開催する予定でおります。 【中山博文】



「緑のダムと水循環」分科会

人工のダムは、造って自然破壊をもたらし、堆砂やコンクリートの劣化による寿命があること、そして莫大な財政赤字を残すこととなります。1995年、アメリカは、「ダム開発の時代は終わった」と宣言し、その後、計画的にダム撤去を進めています。コンクリートダムに代わり、歳月と共に機能を増す「緑のダム」を、河川整備に導入する決断を早めるのが賢明です。森林を豊かにして洪水を減らせるならば、川をコンクリートで固めてきた日本の河川行政の大転換の始まりとなります。自然環境の豊かな河川と健全な水循環を取り戻せるに違いありません。

分科会メンバーはこれまで雨水公開セミナー（11月6日、於学士会館）や脱ダムシンポジウム（11月11日、於衆院会館）に参加したり、文献・資料を集めて、「緑のダム」の基礎知識を学んでいる途上にあります。現在の日本の森林問題は、「植林」ではなく「間伐」にあるという現実も知らされました。今後は、森林はそこに暮らす人たちだけの問題ではないという「流域圏」の発想にも注目して、見聞を深めていきたいと考えています。

検討内容はまだまだ途上ですが、メンバーの英知を集めて意義のあるプランを組み立てて行きたいと考えています。 【田中清子】

「保水型下水道の構築」分科会

これまでの水政策は「雨はいらぬが、水ほしい」という考え方で貫かれてきました。これに対し「水問題」を「雨問題」として捉えなおす根源的な認識に立ち帰ってみましょう。「水が足りなければ、遠くから持ってくればよい」「足元にある水(雨)は邪魔だから、早く捨てればよい」とする発想が、上水道と下水道ではないでしょうか。その極限の効率と経済効果を追求した所産が、今日のダム問題であり、巨大な下水道計画です。ヒートアイランド化や都市型集中豪雨の頻発もその影響です。私たちは、足元に降る雨を大切に受け止める工夫をしなければならないのです。雨の貯留利用、浸透して地下水涵養、屋上緑化などがそうです。

下水道料金の「雨水公費、汚水私費」の原則は、雨の処理は税金で賄うという考え方ですが、根底に雨は邪魔なものという考え方もあるのではないのでしょうか。雨水利用や雨水浸透などで雨水処理に参画する市民が増えつつある現在、新しい雨水処理のあり方を考えていかなければならないと思います。

分科会の名称について、「保水型下水道」は下水道の概念や機能をガラッと変えてしまうものだから、「下水道」という範疇に入らないという意見があり、検討中です。 【高橋朝子】

「安全な飲み水としての雨水」分科会

11月8日に第1回の準備会を開きました。この分科会のテーマは重要な課題の一つかも知れない、という気がしており、どこから手をつけようかと考えあぐねているところです。現在、4つの企画が出されています。

- 1 バングラデシュで展開しているスカイウォータープロジェクトの報告
- 2 都市で雨水を飲むシステムの展望、実践紹介
- 3 ローテク、ハイテク浄化システムの紹介
- 4 中学生による雨水のお茶会

総合的な水利用の見直しへの展開も考えられるほど、非常に大きな、また、重要なテーマです。現在の会員だけではまだまだ力不足ですので、参加者を募集中です（準備会は月1回開催します）。

【今関久和】



バングラデシュで進行中！竹樋雨水利用
（徳永さん作成のミニチュア）

「雨水利用を進める政策」分科会

今年は台風や地震、また集中豪雨に見舞われた年です。洪水、浸水、ライフライン（水道）の寸断。全てに「雨水の貯留・浸透」が絡んでいることに、国や自治体、また住民も気づき始めました。

雨水利用に世間の注目が集まるにつれ、自治体窓口での雨水利用の相談件数も増えています。しかし、きちんと相談に対応できる場所はまだまだ少数です。

雨水利用に積極的に取り組む自治体がネットワークを結び、平成8年に「雨水利用自治体担当者連絡会」が発足しました。現在116の自治体が加入しており、昨年3月の第3回世界水フォーラムでは、会員によるアンケートを集約し、全国の助成金制度や雨水利用施設に関する貴重な資料が作成されました。

今回、国際会議にあわせ、自治体のネットワークを活用し、住民向けマニュアル 新築ビルへの雨水利用導入マニュアル 不要浄化槽の雨水タンクへの転用マニュアルの3つのマニュアルを作成し、国際会議で発表する予定です。 【高島 修】

「農からの発想」分科会

9月の実行委員会総会以来、現在10名の多彩なメンバーで数回の会合を持ちました。10月にはA T T流域研究所が主催する棚田ツアーに有志で参加し、黄金の稲穂や棚田群の景観に見とれました。信州姨捨の棚田では稲刈りを体験し、有機栽培の田圃には生き物が多いと実感しました。

分科会として苦慮しているのは農業問題の多様さです。棚田はモンスーンアジアのシンボルですが、棚田の取り上げ方に新奇さがほしい。国際会議のメインテーマ「つなごう世界、救おうアジアの水危機」からすると、地球温暖化による気候変動が農業や食料生産にもたらす悪影響も考慮する必要があります。農産物は工業製品同様の商品と化し、生産性向上ばかりが求められてきています。さらには外国からたくさん水を食料の形で輸入しているという、仮想水の問題もあります。現在、それらの問題意識の中で、テーマを定めきれずに逡巡しています。

よいアイデアをお持ちの方、議論への参加をよろしくお願いします。 【柴 早苗】

「雨水ユース」分科会

東京雨水国際会議に向け、12月19日から29日まで、大学生を中心としたメンバー10名でインド・チェンナイに視察に行きます。チェンナイに雨の環境学習拠点としてのレインセンターがあり、また雨水利用が条例化されているとのこと。レインセンター館長Sekhar Raghavan氏のご案内により、センター視察、行政の方訪問、都市・農村での実際の雨水利用見学を行います。国際雨水ハウスの発想を得て環境学習提供の方法について学ぶとともに、条例化の背景、インドの雨水利用の実態や問題点を見聞きしてきます。インドの雨水利用は雨を地下に浸透させてからポンプで汲み上げて使うというものです。

12月下旬のチェンナイは雨季が終わって過ごしやすい頃、とはいえ気温は25～30です。気候や条件が全く違う中で、どのように雨水利用が広がっているのでしょうか、また雨水をめぐる文化にはどのようなものがあるのでしょうか。実際に体験してきたい

と思います。2月に報告会を行う予定です。 【吉田明子】

インド・チェンナイ
「レインセンター」
ホームページより



「雨の絵本ひろば」分科会

この分科会は、「子どもと雨」をテーマに、乳幼児とそのお母さん、小学校低学年の子ども達が利用できる「絵本ひろば」を作りたいというところから始まりました。

子育て中のお母さん達にとっては雨はおそらく「ユウツ」なもの。だって、洗濯物は乾かないし、お散歩にはいけないし、赤ちゃんを連れての買い物は本当に大変です。

そんなお母さんや子ども達に「雨って楽しいんだね」と、ちょっとでも感じてもらうことができれば、それが「雨の世界」の入り口になります。

きっかけは「雨と文芸チーム」が集めた絵本を雨水資料館に展示したい、というところから始まりました。でも、せっかく展示するのなら、地域のお母さんや子ども達が来て楽しめる空間を作りたい。

また、子育て中のお母さん達が子連れで行ける場所が限られているということもあり、地域の子育て中のお母さん達が気軽に立ち寄ることができる地域のひろばとしての機能も持つことができれば、と考えています。

ひろばの企画は、各地で絵本展示を行ってきたプ

ランナーの平林英二さんが協力してくれることになりました。

国際会議に向けて、絵本の読み聞かせや紙芝居づくり、また子ども達と雨の音づくりなど、イメージはひろがります。国際会議終了後は、常設展示として残っていけば、と期待しています。

「雨の絵本ひろば」に関心のある方、ぜひぜひ参加して下さい。
【上林裕子】



11月5日

関西で雨水技術者セミナー開催

関西雨水市民の会 久保正年さん

皆様と共に行動してきた雨水利用啓蒙活動の成果なのか、昨年度の京都を中心とした「第3回世界水フォーラム」を機に雨水に関する問い合わせも増えつつあり、雨水に関心を持たれた方々を技術的にフォローできる雨水技術者の養成を目的として、11月5日、関西で初めて「雨水技術者セミナー」を開催致しました。

会場は㈱大阪ガス大ホール、講師は雨水や環境活動で何かと活躍されている村瀬誠氏、佐藤清氏、善養寺幸子氏の3人、参加者は講師を含め70名。行政・大学関係5名、設計関係6名、建設関係(設備含む)41名、メーカー18名と環境に関心のある企業参加型でした。雨水



技術者は技術が裏付けにあるプロであり、雨水利用の指導者であります。設計関係者が余りに少ない点が気になっています(反省点です)。市民の環境に対する関心が高まっても、うまく市民側に立って指導できる技術者がいないと展開は難しいと思います。雨水、緑化、透水性舗装などの環境向上技術を総合的に指導できる技術者を養成できればと思っています。

今年度、大阪府との雨水関連行動として、8月～10月末まで大阪府環境情報センターで小規模な雨水イベント、11月枚方市エコフェアで雨水ブース出展がありました。来年度、大阪府は計画的に雨水活動をしていく予定ですが、当会も共に行動します。

東京では東京雨水国際会議、その後愛知万博での雨水イベント、と雨水の心地よい風がいっぱい吹きますね。楽しみ！楽しみ！

あまみず公開セミナー報告

第1回 10月2日

「江戸の下水道 - 川柳が描く水と暮らし」

講師 栗田彰

中央大学駿河台記念館 29名参加

江戸の下水路は良く整備され、種類も幾つかありました。代表的なものが、生活排水のほか、道路と庇の雨を受けた「雨落ち下水」。単に「雨落ち」、通常は「どぶ」と呼ばれたそうです。道路は真ん中を高めにして、両側に掘られた下水に雨水が流れる仕組みです。ゴミなどをよく掃除し、修理代などの諸費用は名主が払う町会費のようなものから支出されました。「小気味よく大家が落ちて溝普請」(なかなか修理してくれなかったどぶを、大家は自分が落ちたため、すぐ直してくれた)というような川柳があります。明暦の大火(1657年)の際、逃げる人々がずいぶん落ちて、以後、蓋がされたそうです。

この講演に出席するまで、江戸の下水に関して私が知っていたのはごくわずかでした。その1つに言葉だけの「本所割り下水」「おはぐるどぶ」があります。今回、長年の疑問が解けてすっきりしました。おはぐるどぶは、遊女が逃げないよう吉原を囲んでいたどぶです。本所割り下水はご存知の方も多いでしょうが、墨田区の本所地域の水はけをよくするために、道の真ん中を掘り割って造った幅3.6メートルもの小さな川のような下水です。北割り下水と南割り下水が有名で、両岸には桜などが植わっていて水も魚が見えるほど澄んでいたそうです。「黙礼の中を流るゝ割り下水」。武家地が多く、下水を挟んで武士が黙礼を交わしている光景だと説明されました。

ところで江戸時代の長屋の台所の小ささには驚きました。幅わずか90cmほどです何もかも井戸端で洗い物などするようだったのは、その辺にも理由があったのです。流しの下には板が斜めに敷かれて、外の下水へ流れる仕組みになっていました。井戸は殆ど、井戸の底に玉川上水などから流れ込む「水道井戸」。「ありがたさたまさか井戸で鮎を汲み」の句のようにたまには鮎がバケツに入ることもあったようです。「俄照り尻で押し合う井戸の端」(長雨が



「川柳・江戸下水」栗田彰著

(下水文化叢書P112)

やっと止んで洗濯洗濯...)

生活排水や雨水は張り巡らされた川や堀を通して東京湾へ流れ、湾内を豊かな漁場にしていました。下水といえばトイレ。もちろん汲み取り式で、し尿は肥料として葛西など近郊の農村から買い取りにきました。臭気がたまらないので「肥取りはいやがられたり待たれたり」。長屋ではし尿の代金は皆、大家さんの懐に入ったそうです。

そのほか、天水桶は火の用心のため義務づけられていました。屋根に載せる町家もありましたが「吉原のぼうふら虫は屋根に湧き」「行かぬかと天水桶へ指をさし」と詠まれたように屋根に載せた吉原の天水桶は有名でした。

日本の下水路は古来、雨水の排除を主な目的にしていたそうです。現代にもその志は連綿と受け継がれ、徹底しすぎて問題が出ています。江戸の町の「見える・身近な下水」に親しみを感じました。会場で先生が紹介された川柳は81句、小説や映画とは一味違う江戸を味わった2時間半でした。

(糸賀幸子)

あまみず公開セミナー報告

第2回 11月6日 「緑のダムと水循環」

講師 藤原 信

神田学士会館 参加者 25名

2001年、田中康夫長野県知事が「脱ダム宣言」をして以降、「緑のダム」について関心も高まっています。自然破壊をして造られるコンクリートダムの代替案として着目される「緑のダム」とはどんな意義があるのか、林学の専門家である藤原信先生をお招きして、お話を伺いました。

真夏に長期間雨不足が続くと、ダム湖の底が見えるくらいに水位が低下した映像が報じられます。しかし、川は涸れることは決してありません。それは、流域の「緑のダム」の水源によるからです。

流域の森林に降った雨水は、その土壌の雨水のしみこみややすさ（土壌浸透能）や保水力（土壌貯水能）の大小によって、河川に流れ込む時間や量に大きな差があることが検証されています。

林地は裸地の3倍、伐採跡地の1.6倍もの水の浸透能があるとの報告があり、針葉樹林よりも広葉樹林のほうが、とりわけブナの天然林の保水力が最も広く認められています。

こうした「緑のダム」機能は、定量化されてこなかったため、国土交通省は現在でも過小評価のままです。「流域の森林面積に変化がなく、国土の7割を森林が占めているにもかかわらず、洪水や濁

水が頻発してきた」として、ダム事業を推進しています。1960年代後半から70年代にかけて、全国的主要河川の流域の森林は、皆伐と一斉拡大造林の施策により、森林面積の4割から7割まで自然林がスギ・ヒノキの人工林にとって代わりました。洪水災害が全国で頻発したのは、その時期に重なります。

吉野川流域で行っている実験によれば、手入れが行き届かない人工林と、混交林・自然林とでは、2倍から2.5倍も浸透能が違うという結果があります。これまで、林業関係者がいう「皆伐したら流量は増えるし、（手入れされない）モヤシ林では表流水が増える」という説が、確実に証明されたこととなります。間伐を前提に密植された人工林は、維持管理されなければ、林木としての価値が低下するばかりか、「緑のダム」機能が著しく減少してしまうこととなります。日本の森林の危機に木材価格の低迷が拍車をかけています。

「緑のダム」というと、これまで「植林」を思い描いていましたが、現在の森林問題は「植林」よりも「間伐」にあるようです。いかに森林への関心を高め、豊かな森づくりに取り組むのかが問われているのです。水源税や「森林環境税」の導入など、森林はそこに住む人たちだけの問題ではなく、流域全体の人々が支えていかなければなりません。何よりもダム偏重の公共事業のあり方を抜本的に見直すべき時代に来ています。

(田中清子)

すみだまつりで手作り雨水タンクをPR

～手作り雨水タンク講習プロジェクト～

10月2、3日、墨田区錦糸公園で恒例のすみだまつりが行われました。手づくりタンクプロジェクトでは、昨年にひきつづき出店し、雨水利用の推進と2005年の雨水東京国際会議に向けて宣伝活動を行いました。

2日は、10月だというのに真夏日となり、部員はみな汗だくで、天水尊の集水方法について説明したり、レインキャッチを販売したりしました。人だかりもできて盛況でした。

3日は朝から大雨でやむなく閉店しました。今回は場所が悪くテントを借りるのに苦労したので、来年は代金を支払いブースを確保することにしました。機材の搬入・搬出、設営、撤去など、担当の皆様ご苦労様でした。草の根の活動には、多くの会員の力が必要ですね。改めて思いました。

(高原純子)



あまみず公開セミナー 2004年度第3回

雨と土と農業の現場から

雨が大地に降り注いで土を肥やす。大地は生き物の住処であると同時に、作物の生産現場でもあります。今回は2部構成とし、農と大地の営みに着目します。

第1部は、記録映画「根ノ国」(東京写真工房作品、製作：菊地周、1981年、24分)を上映します。土の中のミミズやダニ、カビや細菌などの生と死、植物の根と微生物の共生の様子など貴重な映像が満載です。上映の後に、撮影時のエピソードを監督夫人の菊地文代さんに語っていただきます。

第2部は、栃木県小山市で有機農業を15年間営んでいる館野廣幸さんに、土づくり、雨と土と農業、近代農業との違いなどについて、実践に基づくお話をしていただきます。なにげなく始めた有機農業のおかげで、価値観が180度転換し雑草や虫たちと友だちになって、毎日嬉しくて仕方がないという館野さん。私たちもその想いを分かち合いたいと思います。【あまみず公開セミナープロジェクト】

- 1 日時：2005年1月29日(土)
午後1時30分～4時頃まで
 - 2 場所：すみだ環境ふれあい館
墨田区文花1-32-9 Tel: 03-3611-6355
交通 東武亀戸線小村井駅から徒歩10分
JR 総武線亀戸駅から徒歩20分
 - 3 内容
第1部：「根ノ国」上映と撮影にまつわるお話
(1:30～) 菊地文代さん(雨水市民の会会員)
==== 休憩を挟んで ====
第2部：講演「雨と土と農業の現場から」
(2:30～) 館野廣幸さん
(日本有機農業研究会理事)
 - 4 会費 会員：1000円
非会員：1500円
- 参加ご希望の方は、2005年1月20日までに事務局へFAXまたはEメールで申し込んでください。



12月4日、外手小学校の家庭科室に大張り切りの雨水探検隊33人が集合しました。この日は9月に収穫した自分たちのお米をいよいよ食べる、一番うれしい収穫祭の日なのです。ここに至るまでに、収穫されたお米は、「脱穀」「籾摺り」を経て玄米になったのです。特に籾摺りは、とても時間のかかる地道な作業で、一升瓶に入れたお米を棒でつついたり、すり鉢で少しずつこすり合わせたりして籾殻をとります。でも、その作業なしに美味しいおにぎりは食べられないとあって、皆頑張ってきてきたのでした。

精米機で玄米を白米にし、炊き始めると「早くご飯炊けないかなあ」「ああ、早くおにぎりが食べたい」との声がしきり。豚汁や、玄米を炒って作った玄米茶をいれ、最高に美味しいおにぎりを頬張って、今年の米作りも無事終了しました。

今年の天候とお世話をしてくださった市川の方々に唯々感謝です。
(荒川春子)

雨水探検隊 自作のお米を堪能する



精米機をのぞきこむ子どもたち



風

車道の雨を植樹帯に浸透させる

安藤さんたちの試み

これまでの土木工事では、駐車場や歩道に降った雨は透水性舗装などによって、地下に浸透させることが行われてきました。しかし、車道に降った雨を地下浸透させると、道路の路盤を傷めてしまうことから、土木工事におけるタブーとされていました。表面上は浸透性舗装のように見えても実はすべて排水性の舗装で、雨水はU型溝や雨水管によって下水道又は河川に放流されています。

今回の試みは、道路車道面の雨を集めて車道と歩道との間の植樹帯にトレンチを設け、そのトレンチに雨水を浸み込ませるアイデアです。歩車道境界ブロックを改良して表面にフィルターを設け、その上で植樹帯のトレンチへと浸透させます。今回の実験は、会員の安藤勝治さんが属する(社)雨水貯留浸透協会が、雨水浸透に熱心な東京都小金井市の協力のもと、小金井市梶野町4丁目12番先(東京電機大学前)にてその実験が行われています。まだ実験の途上ですが、1時間当たり30mm程度の降水量に対しても対応可能とのこと。また、初期雨水の問題や道路表面の粉塵等の問題などが気になるところで、水質についても調査を行っており、3月末にはその結果も発表されるとのこと。

(清水英弥インタビュー)



安藤さんたちが行っている車道浸透の実験

バイオガス発電の研究で工学博士取得!

小川幸正さん

本年の9月に大阪大学から工学博士の学位を授与されました。研究テーマは『有機性廃棄物のメタン発酵とバイオガス発電』です。雨水利用ではありませんが、雨水で育ったバイオマス(生物資源)をメタン発酵してバイオガス(主成分はメタンで消化ガスとも言います)を発生させて、これを燃料に発電を行う技術です。バイオガスは化石燃料ではありませんので、風力発電や太陽光発電と同様に新エネルギーとして扱われています。

私が担当した京都府八木町のプロジェクトでは、畜産ふん尿やおから等の食品工場残渣を原料に、バイオガス発電をしています。新エネルギー導入に積極的な欧州は実施件数が多く、日本でも今後各種の食品残渣や生ごみ等を原料に、普及すると考えられます。



京都府八木町のバイオガス発電プラント

新会員紹介 自称「ヒゲの天気おじさん」

原田龍彦さん

昨年まで(財)日本気象協会にお勤めされ、テレビやラジオにお天気関係の出演も多数されてきました。原田さんの姿や声を知っているかも…。いただいた名刺の裏には変わった肩書きもあり、「ヒゲの似合う男性コンテスト」キャスター部門1位とのこと。

現在は、NPO法人「気象キャスターネットワーク」の会員として、小・中学校や老人大学などの講師をされています。また、雨水東京国際会議の「雨の環境教育」分科会の世話人をされています。

原田さんの楽しいお天気の実験を実際に見せてもらいました。ペットボトルの中に雲粒を作るもので、空の上のことが身近なペットボトルの中に見ることができ、驚かされました。(高橋朝子インタビュー)

新潟中越地震被災

皆さんの支援金で雨水タンクを送りました

10月23日(土)18時ごろ新潟県中越地方で震度7を観測する大地震が発生しました。この地震により約3000名が負傷、10万世帯が損壊。雨水市民の会でも震災直後、会員の皆様に支援金を募るとともに、11月11日、12日に副会長の徳永さんと事務局員高橋が現地に赴き被災状況を調査しました。

現地では、十日町市在住の「利雪しんせつ協会」会長であり、当会の会員でもある樋口利明さんの協力を仰ぎ、十日町市、川口町、小千谷市を訪ねました。その結果、各避難所では給水ポイントが非常に限られており、避難生活者が不便に感じていたため、雨水タンクが給水タンクとして非常時に使用できると判断しました。阪神大震災の際にも雨水タンクを100基送った経緯から、今回会員の皆様に募った援助金を雨水タンクの購入費用にあて、「雨水利用事業者の会」12社からの雨水タンク18基を川口町及び十日町市に送らせて頂きました。支援金は「雨水市民の会・被災者支援ネット」として「NPO法人気象キャスターネットワーク」「雨水利用事業者の会」「愛・地球市民プロジェクト(愛知万博)」の団体も賛同し、現地に送った雨水タンクにシールをつけました。

11月27日に再度村瀬事務局長も含め現地を訪れました。川口町では、飲用ペットボトルの水でトイレの手洗いをしていた避難所で、雨水タンクが置かれて手洗い用に使用されていました。十日町市では避難してきた牛の飲み水用に使用されていました。

今回最も教訓となったのは、現地へ赴くことの重要性です。震災直後、様々な物資が送られましたが、情報が錯綜して、欲しいところに届かないことが間々あったようです。ただ現地に行けばよいというボランティアもいて、「ボランティア被害」という言葉さえ生まれました。何が今必要であるのか、そしてそれを誰がするのか。常にこれらを意識し、行動することにより、よりよい支援につながっていくのだと感じました。(高橋佑司)



この通り沿いの家々はほとんど倒壊してしまっていた(川口町)



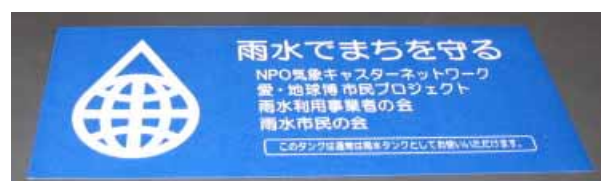
現地に送った雨水タンク。左は徳永副会長、右は十日町市の樋口さん



(左) 仮設トイレの脇にある雨水タンク。左手は以前手洗いに使用していたペットボトル。
(下) 送った雨水タンクに貼ったシール

支援金のご協力ありがとうございました

支援金は「雨水市民の会・被災者支援ネット」として53万9900円集まり、支出は二度にわたる被災地の状況視察とタンク18基の取り付けにあて、残金8万9900円は義援金とします。支援金の募集は終了いたします。(事務局)



(編集後記)今回は雨水東京国際会議に向けた特大10ページ。盛りだくさんな内容につくづく市民の会の活動の広まりを感じます。



雨水東京国際会議チラシのデザイン

Tokyo Asia Pacific
SKY WATER FORUM

の頭文字をとって TAP = 蛇口の意味となります。